

ハーンの *Out of the East* からみる日本人的特質

伊野家 伸一

I

Out of the East は、ハーン (Lafcadio Hearn) が熊本時代 (1891-1894) に体験したことをもとに記された著作である。熊本は松江・出雲に比べ、ハーンにとって好ましい地ではなかったという見方もなされてきている。田部隆次による『小泉八雲』では、熊本においては人間が粗暴にみえ、神道に無関心な学生を目の当たりにし、それがハーンには首肯できなかったことが (213)、また *Out of the East* の “With Kyūsyū Students” は、松江中学を題材にした “From the Diary of an English Teacher” *Glimpses of Unfamiliar Japan* に比して精彩を欠く (牧野 94 - 95) という指摘もみられる。こうした指摘や見方もなされているハーンの熊本時代であるが、果たしてそのような評価のみでよいのか、*Out of the East* から考えてみたい。

Out of the East は、最終章に “Yuko : A Reminiscence” が収められている。「天子様御心配」という日本語で始まるこの章は、ロシア皇太子襲撃事件 (大津事件) を天皇が深く憂慮しており、その心中を察した当時の一般民衆が、負傷したロシア皇太子に慰問の書面、電報、献上の品を送る様子、皇太子警護にあたった一高官に切腹を迫った老齢の侍がいたことなどが語られてゆく。そしてハーンは、日本人に穏やかな面と苛烈な面、双方がみられることを示す。

For this people, like its own Shintō gods, has various souls: it has its Nigi-mi-tama and its Ara-mi-tama, its Gentle and its Rough Spirit. The Gentle Spirit seeks only to make reparation; but the Rough Spirit demands expiation. And now through the darkening atmosphere of the popular life, everywhere is felt the strange thrilling of these opposing impulses, as of two electricities. (333-334)

それから「勇子」という若い娘の話が語られる。

勇子は、神奈川のとある裕福な家に奉公していた。ハーンは、「勇子とは雄々しいという意味を表す昔の武家風な名である」ことを解説している (334)。先のような天皇の心痛を知った勇子は、「至高の忠義を示すには、生命を捧げよ」という先祖の声を聞く (336)。

翌朝、勇子は暇を請い、一命を捧げるに恥ずかしくない身なりを整えると、列車にて京都へ向かう。車窓からの美しい景色は、勇子に生きている喜びを感じさせるが、神道の神々に身を委ねた彼女に生への執着や悲しみはない。黄泉の国で賞賛と労いをもって迎えてくれるであろう身内の者に、思いを馳せるのである (336-338)。

京都に着いた勇子は、「卑賤の身ではあるが、天子様の御心が安んじられるよう一命を捧

げる」旨の手紙をしたためる。翌未明、苦悶の刹那に手足を取り乱した見苦しい死に様とならぬよう、絹の腰紐で処置をした後、侍の娘として手元あやまることなく、勇子は喉をかき切る（338-340）。

勇子の行為は、たちまち各地に伝わる。新聞各紙は、そこに醜聞がありはしないかと躍起になるが、その清らかさに影を見出すことはできず、侍の娘に相応しい立派さを書くより他なかった。天の御子も憂慮をとどめられることとなる。時の大臣らも「全てが変わろうとも、こうした国の心だけは変わるまい」と囁く。にもかかわらず、政府は、高度な国事的理由でもって知らぬ振りをしたのであった（340-341）。

ハーンは、勇子を通してみられる日本人の精神について、次のように述べる。

But these, and many other feelings, are supremely dominated by one emotion impossible to express in any Western tongue –something for which the word “loyalty” were an utterly dead rendering, something akin rather to that which we call mystical exaltation: a sense of uttermost reverence and devotion to the Tenshi-Sama. Now this is much more than any individual feeling. It is the moral power and will undying of a ghostly multitude whose procession stretches back out of her life into the absolute night of forgotten time. (335)

さらに、「勇子自身、西洋人とは異なる過去一数え切れぬ世紀の間、西洋人とは全く異なるやり方で、皆が生き、感じ、考えてきた、そうした過去が付き纏っている魂の住家にすぎないのだ」（335）と、ハーンは続ける。

ここには、日本人が天皇に対して示す忠誠心、そこから起る西洋人には信じ難いほどの行動、心理が紹介されている。ハーンは、それらと日本人にみられる慎み深さや誠実さとのコントラストを提示しながら、ある種の驚きとともに、そうした心理、行動の源泉を日本人精神の根底に見出そうとしているように思える。そして、精神の根底にある存念は「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」（335）として、とらえられている。ハーンによるこうした所見が読める“Yuko : A Reminiscence”が、当著書の最後に置かれたのは示唆的に思える。本稿においては、こうした“Yuko : A Reminiscence”に示されたところとの類似・照応が他の章にもみられないか、また、そこから如何なるものが抽出できるか考えてみたい。

ジョナサン・コット（Cott, Jonathan）は、ハーンの熊本時代を記した“Little Spring, Eight Clouds”において、以下のように述べている。

To Lafcadio, the “pure aggressive selfishness” that went under the name of “personality and individuality” was “intensely repellent”; yet he understood that “the highly selfish and cunning, as well as the unselfish and frank qualities of man are necessary to the preservation of society and development.”...

The West saw and defined the East in its terms and with its own values; the East rarely defined itself to the West, as it saw itself. Lafcadio was able to perceive both realms from a double perspective, ... (319)

ここには、ハーンが「個性と個人性」の名のもとに通用している「純粹に積極的な利己的態度」を嫌悪したこと、そして、西洋と東洋をそれぞれの思考法と価値観から二重にみることによって、双方を理解することができたことが記されている。

ポール・マレイ (Murray, Paul) は、“Kumamoto” において

Hearn's style in *Out of the East* continued to be a fusion of the factual and the philosophical, the anecdotal and the analytical. (173)

というふうに「ハーンの文体は、事実と考察、逸話と分析を一体化させたもの」とみている。こうした指摘も以下の検討において意識されるべきであろう。

II

それでは、他の章もみてゆくことにする。

< 1 > 第2章 “With Kyūsyū Students” では、熊本で担当する学生の様子とともに、熊本という土地柄が語られてゆく。

And here, too, under the shadow of Kiyomasa's mighty fortress, —now occupied by an immense garrison, —national sentiment is declared to be stronger than in the very capital itself, —the spirit of loyalty and the love of country. Kumamoto is proud of all these things, and boasts of her traditions. (30)

ここには、軍隊の駐屯と相俟って、熊本に忠君愛国の精神が満ちている様子がみられる。

学生らもこうした気質を漂わせるが、ハーンは「真に彼らの心深くあるものは何か」を探ろうとする。マロリー (Sir Thomas Mallory) の「アーサー王の死」“Morte d'Arthur” から、サー・ボルスが、苦境にある弟ライオネルをかえりみず、乙女を救いに行く話を聞かせる。学生の反応は、「肉親を見捨てて見ず知らずの女を助けることは、家族愛に反し、義ともいえない、恥ずべき態度だ」というものであった (53-55)。

そしてギリシア神話にある「アルケステイスの話」もハーンは学生に語る。若くして死ぬ定めのアドミタスは、妻ないし両親がその身代わりとなれば助かることから、それを求める。しかし、両親は拒絶する。妻アルケステイスは、夫の身代わりとなる決意をする。これについて、学生たちは妻の行為よりも、「親を犠牲にしてわが身を救おうとしたアドミタス」に強い非難を向ける。夫を責めない妻の態度を批判した者もいた (56-60)。

ここには、アーサー王、ギリシャ神話について、家族愛や孝心というモラルに反するという感想を示す当時の学生がみられる。そして、日本人と西洋人における意識、価値観の相違を感じてゆくハーンがみられるところとなっている。

< 2 > 第4章 “Of the Eternal Feminine” においては、「女性観」について西洋と日本の相違が考察されている。

ハーンは、日本では、花柳界などについては別であるが、一般家庭の女性が恋愛の状況にあることが描かれることはまずないとし、およそ一国の文学というものは、その国の生活を反映するものであるが、日本社会では以下のようなようであると解説する。

The typical woman often figures in Japanese romance as a heroine; as a perfect mother; as a pious daughter, willing to sacrifice all for duty; as a loyal wife, who follows her husband into battle, fights by his side, saves his life at the cost of her own; never as a sentimental maiden, dying, or making others die, for love. Neither do we find her on literary exhibition as a dangerous beauty, a charmer of men; and in the real life of Japan she has never appeared in any such rôle. Society, as a mingling of the sexes, as an existence of which the supremely refined charm is the charm of woman, has never existed in the East. (92)

こうした日本における女性についての見方から、もし欧州の風俗習慣を取り入れるような変化がなされるのであれば、家族関係の解消、全社会機構の解体、全道徳体系の瓦解等国民生活の破滅に繋がるであろうとハーンは考える (93)。

「さらに、女性、妻や子供を誇示するような態度、そうした者たちのために助力を求めること等は日本人にとってはあり得ない。しかし、父母や祖父母のためであれば、助力、慈悲を請うことも容認されるだろう」旨が述べられた後、日本人が恋愛、愛情よりも忠義、孝心を重んじる様子が紹介される。ここにおいても、天皇へ、次いで両親への義務が尊重される旨が示されてゆく。

Love of wife and child, the strongest of all sentiments with the Occidental, is judged by the Oriental to be a selfish affection. He professes to be ruled by a higher sentiment, — duty: duty, first, to his Emperor; next, to his parents. And since love can be classed only as an ego-altruistic feeling, the Japanese thinker is not wrong in his refusal to consider it the loftiest of motives, however refined or spiritualized it may be. (94-95)

このような日本人の意識や感覚について示しながら、妻子への愛を口にしたり、家庭生活に深く関わる話題をだしたりするようなことは好ましくないことであり、個人的であるがゆえに利己的と考える東洋人としては、夫婦の関係を人前でみせるのはみだらなこととなると解説してゆく (99-101)。

< 3 > 第5章 “Bits of Life and Death” では、ハーンの身近な出来事が、逸話的に幾つか取り上げられている。先に述べたように、熊本はハーンにとって全てが好ましい土地ではなかったようだが、「ときたま自宅を訪れるふつうの労働者たちにはいつも魅了され、歓迎していた」(Cott 306) ようである。

第4節では、おますという哑者である娘の逸話が紹介される。ある米相場師に怒りを募らせた町民が、打ちこわしに及ぶが、金銭等には目もくれなかった。しかし、おますの父は、一枚の小判を拾ったがために逮捕される。判事から糾問されたおますは、15歳の内気な娘だったが、父に不利な証言を強いられることを感じ取ると舌を噛み切ってしまう。

She ceased to speak, and a stream of blood gushed from her mouth. She had silenced herself forever by simply biting off her tongue. Her father was acquitted. A merchant who admired the act demanded her in marriage, and supported her father in his old age. (136-137)

かくして彼女の父親は釈放される。しかも、おますの態度に感じ入ったある商人が、結婚を申し入れ、彼女の父親の老後をも世話したことが告げられている。

ここには、激しいまでの親を思う感情とそれによる行為がみられる。そして、こうした苛烈なまでの孝心が、おますという個人に限ってのものではない、とみるハーンの眼差しも感じられるところである。おますの思いと行いが、日本人には是認されるものであることは、父親が釈放されたこと、彼女の行いに感じ入った商人が、彼女を妻として求め、父親の老後をみたことから明らかである。孝心が犯罪に対する法的処罰を退け、補償的役割までも果たしているかの如き様子が伝わってくる逸話といえようか。

第6節では、或る男（一郎）とその妻（おのと）の叔父（嘉作）が諍いを起こし、一郎とおのとが嘉作を殺害する話が、四幕から成る悲劇として示されている。事を遂げた一郎とおのとは、一郎の年老いた母に向かい、事情を告げる。一郎が言う。

“And now, mother, to leave you alone in this world, though you have no other son, is indeed an evil thing. I can only pray your forgiveness. But my uncle will always care for you, and to his house you must go at once, since it is time we two should die. ... And you must not see it. Now go.”(146)

この後、一郎とおのとは壮絶な死を遂げるが、母親には孝養を尽くせない侘びと今後への配慮をみせている。叔父を殺害するまでの行為をなした一郎であるが、孝心は深く持っていたことが伝わってくる箇所となっている。そして、一郎夫婦は常に人から好かれ、子供の時から愛嬌者で知られていたという当局による調査の程も示されている（147）。

ハーンは当事件の所感として、「嫻々たる日本女性の従順な優しさのかけには、強情酷薄、心底から思いつめた復讐心の、そら恐ろしい深謀遠慮、慎重を極めた、たゆまぬ意地が、

俄然あらわれてくる」(148) ことがあることを述べる。さらに「日本人の一部はマライ人に起源を發している」という説を引きながら、当節を以下のように纏めている。

Even thus have centuries of the highest social culture wrapped the Japanese character about with many priceless soft coverings of courtesy, of delicacy, of patience, of sweetness, of moral sentiment. But underneath these charming multiple coverings there remains the primitive clay, hard as iron; —kneaded perhaps with all the mettle of the Mongol, —all the dangerous suppleness of the Malay. (149-150)

この話にも、諍いが昂じて身内同士が殺害にまで及ぶという凄まじい行為がなされるなかで、親に対する孝心と配慮がみられる。この点において、“With Kyūsyū Students”における学生達が示した「家族愛、親への孝心こそ尊重されるべき倫理」、*“Of the Eternal Feminine”*における「親への忠節は、天皇陛下に次ぐもの」という考えとの照応が感じられる。また、同章にみられた「夫に忠実にして果敢な妻」(*Out of the East* p.92) という面も、おのとはみられる。加えて、ここに登場している「おのと」は、一郎の妻、女であるが、自分の叔父を殺し、夫ともに自害するという行動をとっている。“Yuko : A Reminiscence”にて、天子にその生命を献上すべく自刃する勇子も娘、女である。こうした苛烈なまでの激情的な心情と行動をみせる日本人女性という点でも、双方の話には類似・照応がみられよう。

第7節は、死者がでたハーン宅側の家について語られている。死者は長男であったが、かつて心中を図るも、相手の女だけが死に、長男は死にきれなかった。女を殺めた罪に問われ、世間の目に晒される長男を、家族は懸命に支える。心中を図った際の咽喉の古傷が長男を苦しめるが、

Meanwhile, through abstemiousness and extraordinary self-denial, the family found means to pay for medicines, for attendance, and for more nourishing food than they themselves ever indulged in. They prolonged by all possible means the life that was their shame, their poverty, their burden. And now that death has taken away that burden, they weep! (156)

というふうに、一家の重荷、負担であったはずの長男を家族が懸命に介護した様子が描かれている。ここにも、家族への愛情とともに責任、責務といったものが、日本社会には強くみられる様子が看取できようか。

本章においてみられた「父、母、夫、家族への極めて強い感情や意識が、日本人にみられる」背景として、“Yuko : A Reminiscence”において、ハーンが示した日本人精神の根底にある存念、一個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の靈に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの—をみることができないであろうか。即ち、過去・現在・

未来という時のなかで、我々は全て一体なのであるというとらえ方である。家族、身内であれば、その結びつきはより一層強く、皆同体であるということなる。家族の他者を慈しみ、いたわることは、自らを慈しみ、いたわることでもあるのだ。“Yuko: A Reminiscence”においてみたハーンによる観点からすれば、こうした解釈も可能となろう。

< 4 > 第8章“The Red Bridal”は、幼馴染みの太郎とおよしは、成長するにつれ愛し合うようになるが、結ばれることが叶わぬと知った時、敷設されたばかりの鉄道で心中する、という話である。二人が結ばれないのは、およしの継母「お玉」が、およしを嫁に求める悪辣な老人から出来る限りの財をせしめ、そのうえでおよしを老人に嫁がせようとしたためであった。

しかしながら、そうしたお玉であっても、見抜くことが出来ないおよしの性質も示されてゆく。それは、およしが士族であった実母から受け継いだ精神であり、「心深くに秘められた道義上の悪に対する敏感さ、侵し難い自尊心、いかなる肉体的苦痛にも屈しない魂の奥にある意志力」(272)であった。これらを持ったおよしは、表面上は不服な様子もみせず親の勧めに従う旨を述べる。その態度に、お玉は、縁組についての経緯等を話して聞かせる。およしは、残酷でさえありかつ破廉恥なやり取りがなされたこと、道義に無感覚な継母に衝撃を覚えながらも、次のような意識を感じ取ってゆく。

But almost as quickly there rushed to her consciousness an equally complete sense of the need of courage and strength to face the worst, and of subtlety to cope with strong cunning. It was then she smiled. And as she smiled, her young will became steel, of the sort that severs iron without turning edge. She knew at once exactly what to do, —her samurai blood told her that; and she plotted only to gain the time and the chance. (274)

こうした狡知と不義に対するある決意を固めたおよしの目の輝きを、お玉は「金持ちとの結婚が利益になることに気付いたおよしの満足感」ととらえてしまう。誇りと愛を守り、貫くためには死をも辞さず、太郎と心中する決意をしたおよしの心を、お玉は見抜くことが出来なかった。そして、およしと太郎は急行列車にその身を切り裂かれてゆく。

ここで注目すべきは、およしの決意と行動である。狡猾さと計算高さ、さらには残酷かつ破廉恥な駆け引きで決められた縁組を拒み、純粋な誇りと愛を守るために、心中という自ら生命を絶つという行為に及ぶ。これは、女性の殉死という点で、「勇子」、「一郎の妻おのと」に重なる。およしは、恋人太郎に殉じるとともに誇りと愛にも殉じたといえようし、勇子は天皇乃至国に、おのとは夫に殉じたとみることが出来るからである。そして、勇子は、いわば祖先の声に誘われるがごとく身を献じるが、およしもまた、士族であった実母から受け継いだ侍の血を通して、祖先の声を聞いているのである。よって、ここにも、ハーンが日本人精神の根底に見出そうとしているように思える存念「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」

が垣間見えてこようか。

マレイはこの作品を、「現実の日本人の生活の物語を書いてみよう」と心に決めた」ハーンが著したものだとし、

The theme of love suicide, with its background of cruel calculation of social forces which had thwarted the young couple's desires, ... Similarly, 'Yuko', the tale of a girl who takes her own life in an act of national atonement, shows an awareness of the deeper currents stirring in Japanese society. (174)

と記している。'Yuko' は本稿にて取り上げている "Yuko : A Reminiscence" であり、マレイも二つの作品を並置するがごとく、とらえているように思える。

< 5 > 第3章 "At Hakata" では、博多へ向かう人力車からみえる緑草から生命の繋がり、さらには無窮へと思いを馳せるハーンがみられる (72-74)。そして、「鏡は女のたましい」(78) という言葉を紹介するハーンは、「松山鏡」という昔話を思い起こす。鏡の何たるかを知らず、鏡に映る顔が自分のものだとは分からなかった女がいた。しかし、鏡が見る者を映すものであると知り、その臨終に際しては、娘に「お前の母は、このなかにいる。言いたいことがあるば、これに向かって言うように」と告げ、鏡を娘に渡す。母の死後、娘は、鏡に映る自分の顔を母と思い、話しかける (81-82)。

ハーンは、娘の無邪気さを永遠の真理に近いものと考え、理由を次のように述べる。

For in the cosmic order of things the present is the shadow of the past, and the future must be the reflection of the present. One are we all, even as Light is, though unspeakable the millions of the vibrations whereby it is made. One are we all, —and yet many, because each is a world of ghosts. (83)

「現在は過去の投影であり、我々はすべて繋がりをもつ存在だ。ゆえに、この娘も、鏡に映る自分の顔に母なる人の魂をみつけたに違いない」からだと解するのである。ここには、過去→現在→未来という繋がりの中で、我々また万物も存在しているのであり、霊的世界において無数なるものの総和というべき存在なのだ、といったハーンを意識がみられる。この点は、注目しておきたい。"Yuko : A Reminiscence" にて、ハーンが感得している「日本人精神の根底にある存念は、個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」という見方につながると思われるからである。さらに、「光を構成する振動は、言い表すことができないほど無数であるが、光自体はひとつであると同様に、我らも一つなのだ」というハーンの表現にも注目しておきたい。続いて検討する "A Wish Fulfilled" につながるものが感じられるからである。

<6> 第9章“A Wish Fulfilled”では、まず、朝鮮出兵のため熊本に兵士が召集し、戦国武将加藤清正の亡霊も立ち現れたかという雰囲気ながら、「国民的感情が深く奮い立てば立つほど、外見はいよいよ強い自制心を示してくる国民」(283-284)という特質を醸し出している様子が語られる。さらに、国民による懸命な献金、予備兵出生家族援護金等による非常時における支援と兵士の士気高揚のほども紹介されている(284-285)。

そして、ここにおける注記として、以下のことが記されている。

- ・義勇軍への志願者が多数を極めたため謝絶したところ、応召出征の機を断たれたとして、自殺者が続出したこと。

- ・在京城の一憲兵は、帰国する大鳥公使護衛を命じられ、戦線に出る機会を失ったことの無念さから自刃したこと。

- ・一士官が、病のため朝鮮へ出発する当日連隊へ加われなかったがゆえに、病床に身を起すと、陛下の御真影を拝した後、自ら剣を抜き自決したこと。

- ・軍紀違反に問われ、戦線へ出ることが許されないと知った一兵卒の自殺。

- ・一要塞を攻撃中、病に倒れ、意識不明にて病院へ運ばれた大尉は、一週間後回復すると、彼が倒れた場所へ行き、指揮官なく部下を攻撃に向かわせた恥辱について遺書を残し、自刃したこと。

- ・自分が出征すれば面倒をみる者がいない娘を殺し、事が明るみに出ぬうちに自隊に加わり、戦場では、わが子と冥土をともにせんと死を求めた中尉の話。

最後のものについて、ハーンは「勝ち目のない戦に出向く武士は、戦場で思い出してはならない三つ(家郷、妻子、わが身命)を断つために、妻子をわが手にかけて殺すことがあるが、これなどはそうした封建時代の凄まじい精神を想起させる」と述べている(283-284)。

このあたりは、当時の日本人が天皇、国家に対する極めて強い忠節を示している様子と、それを注視するハーンがみられる。

次節では、松江でハーンが教えた生徒が軍人となって訪ねてくる。ハーンは若者を歓迎するが、その若者からも天皇と国への強い忠誠心が伝わってくる。彼とハーンが対座する場面では、

“And now I am so glad,” he exclaimed, his face radiant with a soldier’s joy: “we go tomorrow!” Then he blushed again, as if ashamed of having uttered his frank delight. ...

“Do you remember,” I asked, “when you declared in the schoolroom that you wished to die for His Majesty the Emperor?”

“Yes,” he answered, laughing. “And the chance has come, —not for me only, but for several of my class.” (288)

といったやりとりがなされている。

この後、松江当時の人々について語られてゆく。松江中学で教練を指導していた中尉が妻子を残して出征したことにも触れられるが、若者は「跡取りの男の子を残してゆく中尉は、

心残りがあるはずがない」と述べる。これに対し、ハーンは「父が子の行く末を案ずるのは当然である」西洋人の感覚では理解しがたい旨を示すところから、話は死の観念に及ぶ。死後も、魂魄は家族や友人とともにあるのだと考える若者は

“We think of the soul both as one and as many. We think of it as of one person, but not as of a substance. We think of it as something that may be in many places at once, like a moving of air.” (292)

とハーンに答える。ハーンは「君は、死というものを本当に生や光と同じように考えられるのか」と尋ねるが、若者は「はい」と微笑んで答える。ここは“*At Hakata*”において、過去→現在→未来という繋がりの中で、我々また万物も存在しているのであり、霊的世界において無数なるものの総和というべき存在なのだ、といったハーンを意識がみられたこと、「光を構成する振動は、言い表すことができないほど無数であるが、光自体はひとつであると同様に、我らも一つなのだ」というハーン表現に照応する箇所といえよう。

さらにハーンが「先祖の墳墓の地を遠く離れて異郷で戦死することは、西洋人にとっても、非常に気の毒な気がする」と言うとき、若者は「郷里では、戦死者を弔うべく記念碑が建立されるし、死骸も戦地で焼かれ、極力故国へ送られる。その霊は、全国民から敬慕、尊崇される」と応えてゆく。そして、英霊が祀られた神社に行軍したときの様子を語る。

“... It is a beautiful and lonesome place, among hills; and the temple is shadowed by very high trees. It is always dim and cool and silent there. We drew up before the shrine in military order; nobody spoke. Then the bugle sounded through the holy grove, like a call to battle; and we all presented arms; and the tears came to my eyes, —I do not know why. I looked at my comrades, and I saw they felt as I did. ...” (298-299)

ここは、戦死した英霊に対する日本人独特の心情がうかがえる箇所となっている。ハーンも、若者の口上について、「この経験は、大海の一波が決してそれ一つで起るものではないように、切り離された個人的な経験ではなかった。彼はただ、一民族の祖先伝来の感情を、一つまり、この国の神道に関する、どこと云って掴みどころはない代わりに、計り知れないほど根深い情緒を、つい口にしたにすぎない」(299)と解している。

こうしたところから、若き軍人として戦地に赴くハーンの教え子が示そうとする心理、心情より、ハーンが推察しようとするものは、“*Yuko : A Reminiscence*”において、ハーンが日本人精神の根底に見出そうとしているように思える存念、「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと廻るもの」ということになろうか。

< 7 > 第7章“*Jiu-jutsu*”も興味深い内容であるが、ハーンは、日本という国の個性として「義

務」に注目した記述を行っている。

On the topic of duty the entire people has but one mind. Any schoolboy will say to you, if questioned about this subject: “The duty of every Japanese to our Emperor is to help to make our country strong and wealthy, and to help to defend and preserve our national independence.” All know the danger. All are morally and physically trained to meet it. Every public school gives its students a preparatory course of military discipline; every town has its *bataillons scolaires*. Even the children too young to be regularly drilled are daily taught to sing in chorus the ancient songs of loyalty and the modern songs of war. And new patriot songs are composed at regular intervals, and introduced by Government approval into the schools and the camps. (224-225)

ここでは、義務として天皇や国家への忠節が示されている。この後にも、「政府は、この国古来の忠君愛国の精神を燃やし続ける努力を、決してゆるめない」ことや、「天皇の誕生日には、官立の学校・官庁では、必ず陛下の御真影を拝して国歌等祝歌を歌い、儀式がとり行われる」ことが記されている (226)。さらに、国防のために官吏はもとより、民間からも献金がさかんになれている様子も紹介される (228-229)。こうした様子を、賞賛・敬意を感じさせる雰囲気でもって、ハーンが書いたのは、当時の時代がなさしめるところであろう。ハーンは「日本の努力は、ほとんど信じられぬくらいである。その成功も絵空言ではなさそうである」(229) とまで述べている。しかし、この第 10 節の最後を以下のように終えている。

But the odds against her are vast; and she *may* —stumble. Will she stumble? It is very hard to predict. But a future misfortune could scarcely be the result of any weakening of the national spirit. It would be far more likely to occur as a result of political mistakes, —of rash self-confidence. (229)

上記 “her” 及び “she” は日本のことであるが、時代的制約にとらわれながらも、その後の日本に対する警鐘がみてとれよう。時代をくだった日本がなした政治的判断における誤謬、過剰な自信にとらわれての暴走は、歴史が示すところである。ただし、「将来における不幸があるとしても、それは国民の精神・気概が弱まったがためではないだろう」とも、ハーンは述べる。ここにおいてもハーンは、天皇・国家に対する忠節と義務、孝心となって現れる日本人精神の基底部がいかに不変的であるかを感じているように思える。よってここにも “Yuko: A Reminiscence” における日本人が天皇に対して示す忠誠心、日本人精神の根底にある「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」という存念がうかがえる箇所といえようか。

Ⅲ

(1)

Out of the East には、様々なエピソードやハーンの思い、所感がみられた。そのなかで、多くの箇所から伝わってくるものは、“Yuko : A Reminiscence” において示されていたところのものではなかろうか。即ち、ハーンが日本人精神の根底に見出そうとしているように思える「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」という存念、そして、それに繋がるかの如くみられる「天皇・国家への忠誠」と「孝心、家族愛」ということになろう。こうした日本人にみられる精神的特質に、ハーンは驚きと西洋との相違を感じながらも、批判的なことはほとんど述べていない。“Jiu-jutsu” の章において、わずかに、「政治的判断における誤謬、過剰な自信にとらわれての暴走により、日本が躓く」(229) 危惧が示されているのみである。

それでは、「日本人の義務の意識」について、ハーンは全く疑念や批判を提示していないのか。

ここで、本稿において取り上げてこなかった *Out of the East* 第1章 “The Dream of a Summer Day” に目をむけてみたい。そこでは、旅行中立ち寄った旅館の名が「浦島屋」“the House of Urashima” (3) であったことから浦島伝説に想いを馳せる。この時のハーンは、浦島伝説を「四十歳をすぎてもなお、ハーンの心の内深く刻みこまれて息づいている、母と過ごした幼き至福の日々の原風景……」(牧野、145) と恰も重ね合わせているかのようであり、ハーンはそれほど浦島伝説を好んでいたようである。ハーンは、それにもかかわらず “Is it right to pity Urashima at all?” (18) と首をかしげ、玉手箱を開けてしまった点に「約束に背いた浦島」をみている。そして

Things are quite differently managed in the West. After disobeying Western gods, we have still to remain alive and to learn the height and the breadth and the depth of superlative sorrow. ... How can we pity the folly of Urashima after he had lived so long alone with visible gods. (19)

と手厳しく浦島への非難がなされている。そこには「神々への違背」を行った浦島への非難という面がみられるよう。また「義務の意識」ということについて、日本と日本人に疑念を呈しているようにも思える。ハーンが好んだ浦島伝説と重ねているだけに、その感はより強く伝わってくる。しかも、この章は *Out of the East* の第1章に置かれているのである。これは、忠節・孝心とともに、ハーンが日本人精神の根底に見出そうとしているように思える「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」という存念が、印象的にみられた最終章 “Yuko : A Reminiscence” と対照的な感をなしているように思える。第1章と最終章が対峙するが如き内容を含むことは、注視されるべきではなかろうか。

熊本時代は、本稿当初における指摘等に見られる如く、ハーンにとって日本との蜜月が終わりを告げてゆく日々であったと言うことはできよう。そうしたハーンは、日本の伝統に支えられた忠節・孝心がみられることに敬意を示すと同時に、死をも辞さない、激しく、苛烈なまでの忠節・孝心に驚きと何がしかの違和感めいたものも感じていたのではないか。

(2)

では、当時の日本からハーンが感得した日本人の精神構造とでもいうべきものから、何が抽出され得るか。グローバル化された21世紀において、再び我々に語りかけてくるもの、我々として考えてみるべきものはないか、検討してみたい。

ここでは、政治思想史の碩学丸山眞男の見解に目をむけてみることにする。丸山は「肉体文学から肉体政治まで」において、日本文学にはスケールの大きなイマジネーションの飛翔といったところがなく、こうしたフィクションを創造できない精神構造下では、社会構成力等も十分なものが期待できない旨を論じており、文学もふまえながら日本人の精神構造、その根底に目を向けた政治学者である。

彼は、「日本ファシズムの思想と運動」において、日本のファシズム・イデオロギーにおいて特に強調されている点として次のように述べる。

まず第一には家族主義的傾向を挙げることが出来ます。一家族主義というものがとくに国家構成の原理として高唱されているということ。日本の国家構造の根本的特質が常に家族の延長体として、すなわち具体的には家長としての、国民の「総本家」としての皇室とその「赤子」によって構成された家族国家として表象されること、しかもその際例えば社会有機体説のように単に比喩としていわれているのではなくして、もっと実体的意味をもつて考えられていること。単にイデーとして抽象的観念としてではなく、現実に歴史的事実として日本国家が古代の血族社会の構成をそのまま保持しているというふうにとかれていること。これがとくに日本のファシズム運動のイデオロギーにおける大きな特質であります。この家族国家という考え方、そこから生ずる忠孝一致の思想は夙に明治以後の絶対国家の公権的イデオロギーであって、何もファシズム運動の独占物ではないのでありますが、政治運動のスローガンとして「国体」を強調するファシズム運動において、このイデオロギーが一貫して強く前面にあらわれていることは、なんといつても独伊等のファシズムに見られない特質であり、それは日本ファシズムの社会的な在り方を規定するだけの重要なモメントであります。(42)

ここには、ハーンの *Out of the East* にみられた「天皇・国家への忠誠」と「孝心」が、いわば同一線上において結びつくことを示す指摘がみられる。丸山は、日本村治派同盟書記長である津田光造の見解を引用している。そこでは「日本の家族主義においては、社会の基調を西洋近代の文明諸国のように個人の権利主張には置かず、家族全体への奉仕に置く。家族は社会上、一個の独立した生命体または生活体として、一個の完全細胞だが、個人は

その一部分ないし一要素にすぎない」とされる。さらに、津田は「この家族主義の延長拡大が我らの国家主義となるべきである。我が国家主義は、家族の民族統合体に他ならないからである。この民族統合体としての国家元首、家長、中心にして総代表が天皇である」と述べている (42-43)。

ここには、日本ファシズムを考察するなかで、その特質として上記のことが挙げられている。論旨としては、日本社会の特質をなすものがファシズムと結びつき、そのために他国とは異なる独自のファシズムが日本には形成されたという見方がされているようである。そして、ここでいわれる日本人的特質とは、「西洋のように個人を重んじるのではなく、家族全体への奉仕が尊ばれるべきであり、その延長上に国家が存在する。そして、国家の頂点には天皇が君臨する」というものである。従って、家族ないし家の延長上に国家と天皇が存在することになる。さらに、それがファシズムと結びついたとされるのである。

こうした見解をみてくると、家族は社会、国家の生命体、細胞であるが、個人はあくまでその一部分、一要素でしかないかつての日本では、個人はファシズムにいと容易く飲み込まれてしまうことになる。実際、日本ファシズム化の歴史はその通りであった。しかも、丸山による考察からみれば、ハーンがある種の敬意さえもって見た忠節・孝心は、ファシズムの温床となりうるものでもあったのだ。ハーンが日本人精神の根底に見出そうとしていたように思える「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」という日本人における存念は、全体の中に個人を埋没させてしまう面を有すると言わざるを得ないからである。

ここで行った解釈は、ハーンによって感得されたものがネガティブなところを示すように思われるかもしれないが、グローバル化された今という時代において、我々日本人が国際社会のなかで再確認しておくべき内容を含むものとはいえないであろうか。

Works Cited

Cott, Jonathan. *Wandering Ghost* New York: Alfred A. Knopf, 1991

Hearn, Lafcadio . "From the Diary of an English Teacher." *Glimpses of Unfamiliar Japan* Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc.,1996

-----, *Out of the East*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.

Murray, Paul. *A Fantastic Journey: The life and Literature of Lafcadio Hearn* Sandgate: Japan Library, 1993

田部隆次 『小泉八雲』 北星堂書店, 1950.

牧野陽子 『ラフカディオ・ハーン 異文化体験の果てに』 中央公論社, 1992.

丸山眞男 「肉体文学から肉体政治まで」『現代政治の思想と行動』 未来社, 1977.

-----, 「日本ファシズムの思想と運動」『現代政治の思想と行動』 未来社, 1977.

-----, 「ファシズムの現代的状況」『戦中と戦後の間』 みすず書房, 1977.